

「軍部の暴走による先の戦争……」

三輪 芳朗

二〇〇八年春に有斐閣から『計画的戦争準備・軍需動員・経済統制——統制「政府の能力」』と題し、『政府の能力』の発揮が最も強く期待される戦時に焦点を合わせて、『政府の能力』の実態を分析する「大部の研究書を刊行する。「通説」「常識」「通念」（以下、「通念」とはなほだしく異なる見方を提供する商業的採算見通しの暗い本格的な研究書である。読者の関心を刺激する広告紹介文を四回連載し、多少なりの採算好転を企図することとした（引用文献などについて詳しくは同書を参照されたい。なお、第7章として計画

した『物資動員計画』『生産力拡充計画（政策）』『経済統制』は独立した論文として『経済学論集』（東京大学）二〇〇七年一〇月号、二〇〇八年一月号に発表予定である。

「軍部の暴走による先の戦争……」 というおなじみの解説

「軍部の暴走が引き起こした先の戦争で多くの国民が犠牲になりました」という解説を毎年八月一五日前後に聞くようになって久しい。「軍部の暴走による先の戦争……」かもしれない。いつ頃からか、以下の一連の疑問を抱

くようになった。

「軍部とは誰のことか？」「何人かのグループか？」「グループの規模は数名、数十名、数百名、あるいは数千名か？」「誰（たち）がリーダーか？」「グループを団結させ、団結を維持した手段は何か？」「暴走したのはこのグループか？」「このグループに扇動（先導）された軍全体、あるいはその一部か？」「暴走とは、たとえば、満州事変開始のことか？」「盧溝橋事件、上海の衝突、南京の戦闘、……、太平洋戦争開始などと繰り返し発生したか？」「一度は暴走の発生に成功しても、繰

り返し暴走させ、あるいは暴走状態を数年（一五年？）も継続させることは容易でない。暴走実現の秘訣は何か？「満州事変開始から太平洋戦争開始までの一〇年間、いかにしてエネルギーを維持したか？」『軍部の暴走……』という解説は説得的か？どれくらいの人々が納得しているか？

当初は「こんな疑問を抱く人間はほかにいないのかな……？」と考え、すぐに忘れた。そのうち、「こんな疑問を口にしたら騒々しいだろう。公表する場所もなさそうだし……。だから見ないのか……」と思い始めた。その間、疑問は成長・発展し熟成した。疑問は、おなじみの解説が連想させ、その前提となる「通念」、それにつながる漠然としたイメージにかかわる。

「子供の頃から聞かされて、なんとなくわかったつもりになっていた。しかし、曖昧・不可解・意味不明な部分が多すぎる」と考え、いろいろ調べ始

めた。「そんなはずはない。違っだろう」と予想して別の見方と整合的な「事実」を捜し、驚くほど多様な観察事実・証拠・証言が無視されてきたことに気づいた。おなじみの解説に象徴される図式的理解は「通念」に対する圧倒的支持を基盤とする。図式的理解に対する疑問は「通念」の壁によって圧迫され、萎縮し、柵上げ・抹殺されてきた。

疑問との対面は「ナントカの箱を開く」ことに似ている。疑問は疑問を呼ぶ。そして、「図式的理解、その基盤である『通説』『常識』『通念』は事実誤認であり、実態とはなはだしく乖離した神話である、という意味で誤解・誤りだとすると……」というさらに興味深い疑問・設問の入り口に到達する。一九三〇年代から一九四〇年代前半の日本の政治・経済・社会・生活・歴史の見直しである。「通念」の批判と破壊はその一環である。

「図式的理解」の基盤である「通念」

「図式的理解」の基盤となっている「通念」といっても、内容は明確でない。支持者の間に強力な合意が存在するわけでもない。「通説」が形成され、「常識」「通念」としての地位を確立してから長い時間が経過した。「通説」としての支配的地位が内容の確認・明確化と疑問の提示を困難にし、「常識」「通念」の風化に十分すぎる時間が経過した。

次のような図式的理解が「通念」を象徴する。軍部とは統制派と呼ばれた陸軍高級軍人グループのことである。彼らは、陸軍省軍務局、参謀本部作戦課、関東軍などを活動の中心舞台とした。周到に準備された長期計画に基づいて戦争準備を進めつつ、満州事変を明確な契機とする侵略戦争を開始した。（侵略）戦争の展開は、戦争準備としての国内の政治・経済体制（総力

戦体制)の整備を促進した。計画的準備を整えた「軍部」は、一九三七年七月に日中戦争を開始し、その全面展開の後に矛先を南に向け、さらに米英蘭を相手とする太平洋戦争を開始した。軍部の暴走によって開始・展開された戦争は、国民の多大な犠牲の上に、日本の無条件降伏によって一九四五年八月終了した。

先の一連の疑問に沿ってこの図式的理解を自ら吟味して、おなじみの解説にいささかの疑問も抱かない本誌の読者は多くないだろう。「統制派とは誰のことか？ おおよそ何名の高級軍人がこのグループに属したのか？」「いかにして『軍部』を長期間にわたって暴走させたのか？」「当初より対米戦争を予定し計画的に準備したのか？」「当初は計画しなかったとする。いつ、なぜ、誰が計画を変更したのか？ 対中戦争に勝利できないと判断した段階か？」「当初より対米戦争を計画した

とする。勝利に至る手段とシナリオは何か？ 周到な計画か？」『計画的戦争準備』『総力戦体制』の具体的かつ実質的内容は何か？」「計画的戦争準備」は有効に実施できたか？ 誰が実施したか？」「革新官僚」か？ 誰のことか？」「有能」だったとする。少数の『革新官僚』に desk plans 作成以上の何ができたのか？」

一九三七年七月の日中戦争開始時点と四年半後の太平洋戦争開始時点と比較する。参謀本部の作戦課長は六人目、作戦部長は五人目、参謀次長は六人目であった。陸軍大臣は四人目、陸軍次官は五人目、軍務局長は七人目、軍事課長は三人目、軍務課長は五人目であった。特定人物が特定の地位に君臨して「軍部」を「暴走」させたようには見えない。

「軍部の暴走……」？

一九三七年七月七日夜、北京近郊盧

溝橋周辺の軍事衝突を発端とする日中戦争が開始された。翌月に波及した上海の激闘の後、日本軍は同年一二月一三日南京を攻略した。日中戦争開始四カ月後、太平洋戦争開始四年前である。三七年一〇月二七日の日本政府(廣田外相)の依頼に応じたトラウトマン駐支ドイツ大使の仲介による和平交渉が、南京攻略に伴う日本側の条件引上げで流産した。当時の状況に関する関係者(目撃者)の以下の証言は、読者に「軍部の暴走……」という解説に対する疑問を喚起するだろう。

まずは参謀本部の戦略的判断に関わる。防衛庁防衛研修所戦史室編『大本営陸軍部(一)』(戦史叢書八、五二八頁)は「近衛内閣は作戦的に自信を持たない陸軍統帥部の意向を無視して事変早期終結を見限った」として、河邊作戦課長の解説を紹介する。

対支判断において、蔣介石は、わ

新刊案内

●良知方、追悼論集
**思想史と社会史
 の弁証法**

川越修・植村邦彦・野村真理編
 ●菊野・4/70頁・7980円
 平子友長・神田順司・松岡昌・
 篠原敬昭・植村邦彦・川石隆史・
 野村真理・川越修 執筆
 《良知カコレクシヨ目録付》

●POSTMODERNISM,
 ECONOMICS AND
 KNOWLEDGE(2001)の訳

経済学と知

一ホスト/モダン・合理性・
 フェミニズム・贈与
 Sカルンバーガー/J・アメリナ、
 D・ルッパオ 編著/長原豊監訳

●菊野・520頁・8400円
 経済学は「他者」となるもの
 か? 米国の「ホスト・モダン派」
 が拓く経済学者たちの知の境界

●養子縁組家族の会く絆の会
 20周年記念出版

親子による

養子縁組の選択

絆の会 編 ●2920円
 養親となった家族の記録と(絆
 の会)の家族の詳細なアング
 の調査から、養子縁組家族の実
 態と意識を明らかにする。学習会
 講演「真実告知」心理学者より
 みた親子関係や「特別養子制度」
 の考え方を申請の手続き」を付。

●民主政の理論と概念の展開
アメリカ政治学と

政治像

ジョン・G.ガネル/中谷義和訳
 ●6300円
 アメリカ政治学に底流している
 民主的思想の固有の内在的意識
 とはどのようなものが解明する

●記号的理性の虚偽をおぼく
記号的理性批判

宇波 彰著 ●2940円
 現代は「記号」が支配している時
 代である。人文はなぜ、それを理
 性的と錯覚するのか?

御茶の水書房

T113-0039 東京都文京区本郷5-30-20
 TEL:03-5684-0751 FAX:03-5684-1063
 http://www.ochanomizushobo.co.jp/

一九三八年一月一六日、政府は「帝國政府は爾後国民政府を対手とせず」

が武力に屈して軍門に降るといようなことはない。長期持久戦争を指導し得るであろうと多田次長や石原部長は考えていた。……多くの者は、支那の力を軽視して、恐らくポツキリ折れるだろうと考え、上海を陥して南京へ行く前に手を挙げてくるだろうという……。……国民が一番強気で、次が政府であり、参謀本部が国家全般を憂慮して最も弱気であった。

とする義現を含む声明を発表した。これでも不十分として、同年一月一八日次の補足声明を行った(同上、五二七―二八頁)。

爾後国民政府を対手とせずと云ふのは同政府の否認よりも強いものである元来国際法上より云へば国民政府を否認するためには新政権を承認すればその目的を達するのであるが中華民国臨時政府は未だ正式承認の時期に達して居ないから今回は国際法上新例を開いて国民政府を否認すると共に之を抹殺せんとするのであ

る
 この頃には、田中新一陸軍省軍事課長の手記のごとく、短期終戦の見込みは薄いと考えられていた(同上、五二九頁)。田中は四年後の太平洋戦争開戦時の参謀本部(大本営陸軍部)作戦部長である。

国民政府を相手にせずという態度は、和平への希望よりは結局戦争長期化へのあきらめが基礎となっていた。……/……短期終戦の見込みを中心とする場合は、蔣政権を相手に

することは当然であるが、長期戦の判断に立つ限りは、百年かかってでも新興支那を再建して、これと日支関係を根本的に調整することが基本的目標とならざるを得ない。／問題は、そのような大業が、現在の日本の実力と国際環境下において、果たして実現の可能性があるかどうかであるが事実は着々と長期戦化の道を進んでいる。

「世を挙げて、中国撃つべしの声であった」

『軍部』関係者のものだけでは……」と不満な読者のために、石射外務省東亞局長の一九五〇年の回想『外交官の一生』から、「ジャーナリズム、大衆、議会」の一部である。

事変発生以来、新聞雑誌は軍部迎合、政府の強硬態度礼賛で一色に塗りつぶされた。「中国膺懲」「断固措

置」に対して疑義を挿んだ論説や意見は、爪の垢ほども見当らなかつた。人物評論では、「明日の陸軍を担う」中堅軍人が持てはやされ、民間人や官吏は嘲笑を浴びせられた。……／九月初旬開かれた臨時議会は……軍部の御機嫌を取り、事変費二〇億二千万円を鵜呑みにした。／……／元来好戦的である上に、言論機関とラジオで鼓舞された国民大衆は意気軒昂、無反省に事変を謳歌した。……暴文膺懲国民大会が人気を呼んだ。／「中国に対して毫も領土的野心を有せず」などといった政府の声明を、国民大衆は本気にしなかつた。彼等は中国を膺懲するからには華北か華中かの好い地域を頂戴するのは当然だと思った。／地方へ出張した或る外務省員は、その土地の有力者達から「この聖戦で占領した土地を手離すような講和をしたら、我々は蓑旗で外務省に押しかけ

る」と語窮られた。／……／世を挙げて、中国撃つべしの声であった。

盧溝橋事件直後の状況も同様である。参謀本部の方針を踏まえた日本政府の「不拡大方針」の下、沈静化の方向が見え、「国民政府も現地協定の解決条件を黙認する意向であることが明らかにされ」た段階で、七月二五日から二六日にかけて天津と北京のほぼ中間の郎坊で軍事衝突（郎坊事件）が発生した（この間、七月一九日蒋介石は廬山会議で有名な最後の閣頭の演説をした）。二八日早暁、「皇軍の二九軍の膺懲戦が開始された。ジャーナリズムは政府の決意を礼讃して怪しまず、民衆は戦争熱に浮かされた。情勢は急転、燃え上がって手のつけようもない」状況に陥った（同上）。

次も石射の『回想』による。一九三七年七月三〇日（「郎坊事件」直後である）に陛下から近衛首相を通じて杉

<p>現代日本を考えるために 一戦前日本社会からの視座— 須崎慎一・内藤英直著 情報操作 はいかにして民衆のジェネレーションを 駆り立てたのか。 定価2,415円</p>	<p>教育と子どもたちの社会史 小針 誠著 多様な子ども観とその の歴史を読み解く。 定価2,415円</p>	<p>個人主義と共同体主義 の両面的乗り超え 一マルクス説の整理と補正の試み— 元田厚生著 マルクス・アウソシ エーション論の再構築を試みる。 定価3,990円</p>	<p>変容する熊本の労働 荒井勝彦著 熊本県に焦点をあ て地方の労働経済を検証する。 定価3,990円</p>	<p>信用論・恐慌論の研究 鈴木勝男著 信用体系の形成お よび恐慌の論理を体系的に分析 する。 定価3,150円</p>	<p>ブッシュのイラク戦争と は何だったのか 一大義も正当性もない戦争の背景 とコスト・ベネフィット— 野嶋久和著 「ベトナム化」し つつあるアメリカのイラク政策 の背景と今後を分析する。 定価2,625円</p>	<p>経済学の古典と現代 武田信昭著 ケネー、J.S.ミル、 マルクスおよび「資本論」の商 品・貨幣論について論究する。 定価3,150円</p>	<p>グローバルイズムの幻影 一市場論と格差社会の経済学批判— 上条 勇著 過去から現代まで の経済学のエッセンスを平明に 解説する。 定価1,575円</p>	<p>「はだしのゲン」がいた 風景 一マンガ・戦争・記憶— 吉村和真・福岡良明編著 「は だしのゲン」は戦後日本人の心を いかに記憶されてきたのかを 考察する。 定価2,520円</p>	<p>祥出版社 〒270-0004 千葉県松戸市新松戸7-65 TEL/FAX 047-344-8118 http://www.azusa-syuppan.co.jp/</p>
--	--	---	--	--	--	---	---	--	--

山陸相や廣田外相に「もう、この辺で外交交渉により問題を解決してはどうか」とのお言葉が伝えられた。首相と陸相が話して、華北の戦争はもうやめて、外交交渉に切り替えようということになった。杉山陸相から言われて柴山陸軍省軍事課長が石射局長に会い、「戦争をやめなければならないが、停戦の申し入れは日本軍のほうからしにくい。停戦を中国側からいい出させる工夫はないものか。外務省が交渉して、中国側から停戦を申し出させてくれないか」と言った。「軍は面目上、停戦を中国側からいい出させたい、とい

うけちな考えにとらわれていたのだが、それを咎めている暇はない」と考えた石射の努力が始まった。

最後は、佐藤賢了（太平洋戦争開戦時の軍務課長。間もなく軍務局長）が紹介するエピソードである。一九三七年八月一五日の閣議で、中支出兵を決定した後、杉山陸相が廣田外相に「いよいよ日華全面戦争になるが、陸相としては非常に困る……。私らが弱音をまくことは対敵宣伝上出来ないが、外交で何とかまとめてもらう工夫はないか」と心から言われた。中支出兵という全面戦争決定直後に、陸相がこんな

申し入れをしたのは、陸軍が事変の早期解決を希望していたことを物語る。廣田外相は陸軍の肚は徹底的にやるものと思っていたから、陸相からこんなことを言われて大いに驚いた。

日清戦争や日露戦争の講和時にも類似の現象が見られたことを想起する読者も少なくないだろう。

（みわ・よしろう）

東京大学大学院経済学研究科教授

『王著』『日本の企業と産業組織』『政府の能力』『産業政策論の誤解』（共著）、*The Fable of the Keiretsu.*（共著）、『経済学の使い方』（共著）など。